



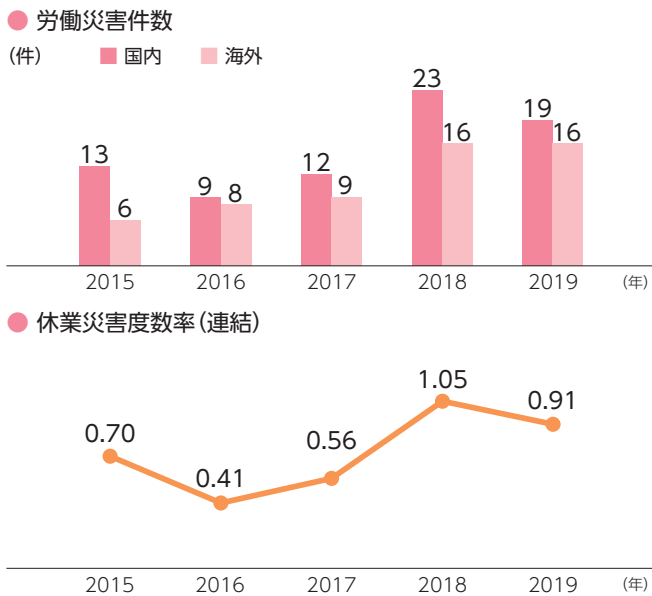
安全がすべてに優先する

日軽金グループでは、「安全がすべてに優先する」というシンプルな基本方針のもと安全活動を推進しています。安全活動は国内外のグループ会社の従業員をはじめ、各事業所における派遣社員、業務委託先社員、取引先を含めた活動のため、すべての働く方々にとってわかりやすいものにして、方針の浸透を図ることを目指しています。

労働災害発生状況

日軽金グループの2019年の労働災害は、日本国内は前年比減少、海外は横ばいでした。

前年に比べて減少傾向にあるものの、依然多く発生しています。そのため、さらなる安全な機械設備づくり、安全な作業づくり、安全意識の高い人づくりを充実させることで、労働災害防止に取り組んでいます。



二本立ての再発防止活動

日軽金グループの再発防止活動は二本立てです。1つは、労働災害が発生した事業所での徹底した対策の実施、もう1つは、グループで発生した重篤な災害を他の事業所で発生させないための類似災害防止の取り組みです。

徹底した災害対策

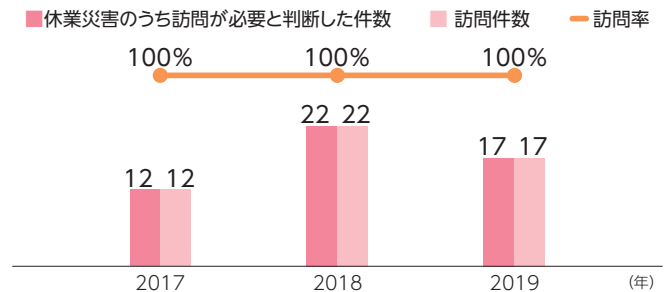
● 第三者による災害検証・再発防止

労働災害が発生すると、まず始めにその事業所の安全衛生責任

者を含む担当者、関係者が原因の究明をはじめとした再発防止対策を検討、実行します。一番現場のことがわかるメンバーが対策を考え、実行することでしっかりした対策となりますが、他方、慣れによる見落とし、思い込みなどが起こる可能性があります。また、普段から同じ事業所で仕事をしている者同士でもあり、お互いの立場を気づかたり、厳しい対策を躊躇したりすることが起こる懸念もあります。このため、グループの安全衛生統括部門のメンバーが当該事業所とは別に第三者の視点で現場確認を行います。事故発生日から1週間以内、1か月後、6か月後と計3回の現場確認を行い、実施された対策が有効か、対策がしっかり定着しているかなどを評価しています。これにより、マンネリ化や予定調和を防止するとともに、他事業所で実施された好事例を採り入れることができるなど、より専門的な知見に基づいた対策ができる取組みになっています。

2019年度は、災害の原因分析と対策立案を合理的に進める方法の指導や、法的規制の解説や外部機関による教育受講をアドバイスすることなどにより、当該事業所の災害対策活動を支援しました。

● 災害発生事業所の訪問率



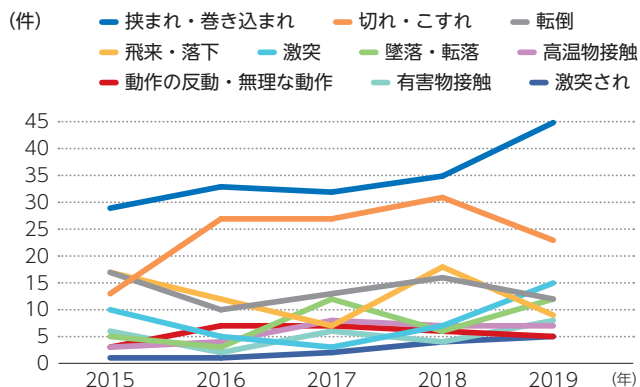
類似災害防止の取り組み

2017年10月、中国のグループ会社にて、架台に立て掛けていた製品用の鋼板が倒れ、間に入って作業していた従業員に倒れ掛かって死亡する災害が発生しました。2018年9月にはインドのグループ会社で原材料を運ぶコンベアに清掃作業中の従業員が巻き込まれて死亡する災害が発生しました。

このように、グループ内で重篤な労働災害が発生した場合、二度と同じような災害を発生させないため、グループ内のすべての生産拠点で同様の災害が起きる要因が放置されていないか、リスクが見落とされていないかを総点検しています。

現在、「高所からの転落」、「挟まれ・巻き込まれ」、「立て掛け物転倒による下敷き」、「フォークリフトによる事故」に取り組んでいます。中でも「挟まれ・巻き込まれ」災害は、一度発生すれば重大な結果を招く可能性が高く、日軽金グループで発生している労働災害の最多の発生要因となっています。

● 災害類型別の災害件数(国内)



※休業災害、不休業災害および微傷災害(不休業災害に至らない災害)も含む

● 活動項目別の課題

活動項目	課題
高所からの転落災害防止	・ 非正常作業では設備的対策が困難で作業標準書も整備し難い ・ 物流部門では設備的対策が荷主の施設に依存する部分が多い
挟まれ・巻き込まれ災害防止	・ 回転部分・可動部分が膨大な数におよび、設備的対策の整備に時間がかかる
立て掛け物転倒災害防止	・ スペースに限りがあるため、一時的に置いておくなどの立て掛け物が発生し易い ・ 倒れ防止措置ルールなど、人に頼る対策が多い
フォークリフト災害防止	・ フォークリフト台数が多い反面、スペースに限りがあるため、人車隔離が進まず、人と車の導線が接近する場面を排除できない ・ 人が操作する機械であることから、操作ミスが排除できない

類似災害防止の活動

「挟まれ・巻き込まれ」は典型的なリスクとされ、これまで何度も安全対策が考えられてきたにもかかわらず、災害件数は減っていません。そこで、これまでのように「こうすれば事故が起きない」という視点で対策を考えるのではなく、「こうすれば事故を起こすことができる」という視点で点検を行いました。事故は思いもよらない事象や行動、またそれらの偶然の重なりによって起きることが少なからずあります。取って、事故を起こす条件や環境を考え、それをあらかじめ撲滅しようという取り組みです。

視点を変えて総点検をした結果、グループ全体で6,100件のリスクが検出されました。そして、現在は6,100件すべてのリスクに対して100%対策を行うことを目指して活動をしています。

日本軽金属(株)蒲原熱交製品工場では、点検で発見したリスクについて、定期的な「リスクアセスメント(機械などの危険性または有害性などの調査:労働安全衛生法)」により、継続したリスク低減活動を行っています。



日本軽金属(株)蒲原熱交製品工場の改善例
切断機周辺の安全柵を追加、安全装置を設置した

安全・衛生活動における情報技術活用

日軽金グループでは、安全意識の高い人づくりの一環として、危険な作業や設備を体感できる安全教育施設を整備・運営しています。現在、9事業所に設備を設置しています。

さらに、日本軽金属(株)蒲原製造所では、これまでの実作業・実機で行う模擬体験教育に加え、2019年度にVR技術を活用した体感施設を導入しました。この設備では、感電事故体験のほか、体感することが難しい高所からの落下事故も体験することが可能となりました。

今後は、AIによる画像認識技術を活用した危険監視・検知システムを利用して、挟まれ・巻き込まれ災害などの防止につなげることや、バイタルセンシングを利用して作業者の体調や熱中症リスク、転倒・転落リスクを検知して安全管理に役立てるなど、デジタル技術の導入も積極的に進めていきます。

VOICE VR体感施設体験者の声

日本軽金属(株)環境保全・安全衛生統括部
北口 崇(写真右側)

視覚と聴覚が外界と隔離されるので、没入感がすごく、リアルな感覚が体験できました。特に高所からの落下体験プログラムでは、疑似体験と分かっていながら、落下の瞬間、体をのけぞらせてしまいました。高いところは怖いと心底感じました。実際の転落は絶対にしたくはありません。



VR体験の様子

新型コロナウイルス感染予防のための消毒指導

日軽金グループでは、新型コロナウイルス感染予防のためのさまざまな対策(➡p.12-14)を実施しています。中でも、消毒は感染者などが発生したあとに素早く確実に行うことが重要であることから、職場で実施することになっています。そのために、職場において安全で適切な消毒ができるよう、作業手順を写真や動画で解説したマニュアルにまとめました。また、消毒する場所に漏れが出ないように消毒作業記録シートも用意しました。このようなツールをグループ全体で共有して集団感染の防止ができるよう取り組んでいます。

新機オフィス版

消毒時の留意点 (まとめ)

7. 拭き掃除は消毒液を十分に含ませた不織布で一方方向に拭き取り、自然乾燥あるいはカラ拭きする。消毒対象に直接スプレーは厳禁。不織布は頻繁に交換

【ポイント】

- ・ 直接スプレーした場合ウイルスが拡散、吸引による体調不良、引火するリスクあり
- ・ 数名分のデスクやテーブルを拭く程度で交換

消毒指導マニュアル(抜粋)